銭恂と早稲田大学図書館

高木　理久夫（資料管理課）

銭恂（右）と陸徵祥（1871－1949）。王彦威纂輯『清季外交史料』（北京　書目文献出版社　1987年刊本）第一冊、「清季外交史料相片十一」より。撮影時期は不明だが、同書のキャプションには、「清出義國大臣念劬錢恂　清出和國大臣子忻陸徵祥」とある。陸徵祥は、上海生まれ、1912年には民国政府の国務院総理兼外交総長となる人物で、1919年のパリ講和会議には中国首席代表として臨んだ。

【外交官とは】

「外交官」と言われて、どのような人物像を思い描くだろうか。イデオロギーを超え、国益のため冷徹なまでのリアリズムを貫いたキッシンジャー補佐官、人道主義に徹し多くのユダヤ人の命を救った杉原千畝、あるいは元外務官僚佐藤優氏が「裸になって口紅で腹に絵を描いたヘソ踊り」をすると批判する現代日本の一部外務官僚等、様々なイメージがあるだろう。しかし、清仏戦争、日清戦争、義和団の乱、さらには辛亥革命と、清朝末期から民国初期における中国の外交官が、欧米、日本の列強諸国を相手に、常に亡国の危機を背に緊迫した状況に身をさらしてきたというイメージは、多くの方々が共有するところだろう。

【張之洞の名代として】

原籍浙江帰安（現浙江省湖州市）の銭恂（1853-1927）は、そのような激動の中国近代を清国の外交官として生き抜いてきた人物である。彼は湖広総督張之洞 (1837-1909) のもとで頭角を現し、湖北から日本へ派遣される留学生の監督官として、明治31年（1898)、来日した。もちろん単なる学生監督官ではなく、清朝きっての実力者である張之洞の日本における名代でもあり、大隈重信は、銭恂の東京専門学校への参観に自ら同道し、饗応したほどである（明治32年６月12日)。

東京滞在中の銭恂のもとには、中国の張之洞から日夜、電信が送られてきていた。その電信によれば、銭恂は、義和団の騒乱中、湖北への武器調達に力を尽くしたり、清国留学生の多くが張之洞の政敵で日本に亡命していた康有為（1858-1927）の思想にかぶれてしまっていることを強く叱責されたり、さらには自身の感情にまかせた言動を慎むようにとまで命令されたりする始末である。才気煥発にして談論風発を好む人士であったのだろう。

【銭恂とその寄贈図書】

そのような性格の銭恂は、大隈重信および当時の学園の気風にほれ込んだのだろうか、明治34年（1901）と翌年の二度にわたり、当時の記録によれば百種以上四千冊におよぶ漢籍を、東京専門学校図書館に寄贈した。寄贈に際しては自ら筆をとり、「清國人錢恂寄贈日本東京専門學校大學科漢文書之目錄」と題して詳細な目録まで作成した。この目録は今でも『清國人錢恂寄贈図書目録』として中央図書館に現存する。その当時学園は大学開校に向けて図書館の大規模な拡充の最中であり、図書館は、『早稲田学報』（第46号）に明治33年10月付で、「篤學ノ士此廣告一覽ヲ乞フ！！！」と題して、図書の寄贈を大々的に呼びかけていた。そのような状況において、銭恂の寄贈書は、大学図書館としての偉容をそなえるうえでまたとないコレクシ

ョンとなったのである。すなわち明治35年（1902）11月24日、東京専門学校図書館を参観に訪れた項文瑞という人物は、『遊日本學校筆記』の中で、

錢恂所贈文梓等書四架、皆滿貯焉。

錢恂が寄贈した書籍は四つの書架いっぱいにある。と瞠目している。

その当時から百年以上を経た現在、中央図書館所蔵の漢籍総冊数は９万冊を超えるまでになり、その中で錢恂寄贈書と確認されるものはおよそ３千７百冊である。その詳細については『早稲田大学図書館紀要』第55号掲載の拙稿、「早稲田大学開校期における錢恂の寄贈図書について」をご覧いただきたい。

なお、錢恂の異母弟である錢師黄（のち夏と改名、1887-1939）は、明治39年（1906）、早稲田大学に入学している。留学中、日本に亡命していた思想家、章太炎（1869-1936）に師事した彼こそ、その後、文学、文字学、音韻学の大家となる錢玄同その人である。

【その後の錢恂】

日本と中国両国往復の歳月の後、錢恂は光緒33年（1907）出使荷国（オランダ）大臣、翌年には出使義国（イタリア）大臣となり、宣統元年（1909）に帰国した。辛亥革命で清朝は滅亡したが、民国元年（1912）、浙江図書館長に任命され、民国３年（1914）には参政院参政に任じられた。章太炎、張騫等とともに中華民国の国歌制定にかかわったり、文瀾閣本四庫全書中、戦乱で散逸していた書籍を捜索、二百種をこえる書籍を回収したという。民国10年（1921）、かぞえで69歳となった錢恂は、家譜『吳興錢氏家乗 三巻』（鉛印本１冊）を出版した。自歴においては、卒年月日時の部分を空白にしてあり、残された家人が手書きで（下線部分）、「丁卯年正月廿三日寅時」と加筆している。時に民国16年（1927）、１月23日払暁。先月12日、七十三回目の誕生日を迎えたばかりであった。

明治39年から翌年にかけて、早稲田大学が設立した清国留学生部に在籍する学生たちが予科を修了するにあたり、その記念として残した詩文や書画が『鴻跡帖』と題して綴じられ、中央図書館に伝わっている。その中に「歳次丙午秋八月 中國閒民 錢恂」と文末に記す、錢恂自筆の色紙が１枚ある。歳次丙午は、光緒32年である。しかし、「大清国」ではない、「中国」の民と記してある。外交官錢恂には母国の行く末がすでに見えていたのだろう。

明治36年 (1903) の清国留学生。前列大隈重信夫妻、鳩山和夫夫妻（当時校長）をはさんで高田早苗（右から２人目）、天野為之（左から３人目）。いわゆる辮髪を頭上に編んでいる学生の姿が見える（『早稲田百年』校倉書房 1979. 56頁解説より。写真提供：早稲田大学大学史資料センター）。